

日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所
162-0805 東京都新宿区矢来町 65
電話 03 (5228) 3171 FAX 03 (5228) 3175
発行者 総主事 司祭 相澤 牧人



(2009年9月23日)

日本聖公会宣教 150 周年記念

<こぎ出せ、沖へ> <みんな集まれ!>

管区事務所総主事 司祭 ヨハネ 相澤 牧人

ローワン・ダグラス・ウイリアムズ カンタベリー大主教は、「軽やかに歩くということ、それが、日本聖公会が担いうる宣教の中身なのです。」と。

キャサリン・ジェファーツ・ショーリ米国聖公会総裁主教は、「自分の周りの社会を、天の国へと変えていけるかどうか。日本のよき地に育った種から、どのように福音を宣べ伝えますか?」と。

9月22日に行われた夕の礼拝ではジェファーツ・ショーリ主教が、翌日の23日の記念聖餐式ではカンタベリー大主教が私たちにメッセージを語ってくれた。これらのメッセージは、宣教150年を迎えた日本聖公会が、これからさらに福音宣教へと歩みを続けていくときに、多くの示唆を与えてくれていると

□会議・プログラム等予定

(前回報告以降追加
および9月25日以降)

- 7月
- 31日(金) 宣教150周年記念礼拝実行委員会「礼拝部会」
- 8月
- 11日(火) 宣教150周年記念プログラム実行委員会
- 21日(金) 正義と平和・憲法プロジェクト作業会
- 9月
- 2日(水) 宣教150周年記念礼拝実行委員会「ゲスト部会」
- 3日(木) 正義と平和・憲法プロジェクト作業会
- 7日(月) 宣教150周年記念プログラム実行委員会
- 7日(月) 宣教150周年記念礼拝実行委員会「礼拝部会」

(次頁へ続く)

思う。(お二人の説教は別掲記事をご覧ください。)

2006年の第56(定期)総会で「2009年に宣教150周年記念礼拝を行う」という議案が可決され、記念礼拝実行委員会が立てられてその準備が進められてきた。さらには、今年に入ってプログラム委員会が立てられ、前日の企画が考えられていった。立教大学の好意で、大学の一部を開放していただき、そこを会場にして「みんな集まれ」とのテーマの下で、夕の礼拝を中心に、様々なプログラムが実施された。

50数件のブースが出され、教会、施設、働きのグループが、自分たちをアピールし、理解を求め、また交わりを深めていた。日本聖公会の全教会、施設の写真、また教役者の顔写真が展示され、いながらにして北海道から沖縄までの聖公会の教会の姿を知ることができたのではないかと思う。大韓聖公会からはオモニ合唱団が参加され、チャペルでのコンサートは、立錫の余地の無いほどの状態であった。そのほかにも、東アジアの平和と聖公会の役割というテーマでのシンポジウム、カンタベリー大主教と青年たちとの交わり、学食での交流会と、前日の賑わいは予想をはるかに超えたものであった。夕の礼拝は立教大学のタッカーホールが満員となり、座れない方もあった。おそらく1400人以上の方が礼拝に参加されたのだろう。

9月23日はカトリック教会の東京カテドラル聖マリア大聖堂をお借りしての記念礼拝である。朝からボランティアが集まり、それぞれの担当に分かれ準備が進められていく。午後1時30分からの礼拝であるが、早くから人々が集まりだした。150年の記念の礼拝を“一堂に会して守ろう”との思いが満ち溢れていると感じられた。約3,000人の方々が集い、これもまた予想をはるかに超えた。海外からは、イギリス、アメリカ、オーストラリア、香港、台湾、ミャンマー、フィリピン、韓国から来日され、この記念礼拝を共にささげてくださいましたことも感謝である。定刻になり281名の教役者団と奉仕者のプロセッションが始まった。肅々と入堂を迎える会衆、そして389番「主イエスよ われらの礎となり」の聖歌でもって聖餐式が始まる。およそ2,850名の方が祭壇の前に進み出での陪餐、そして子どもたちはカンタベリー大主教から一人ひとり祝福を受ける。母親に抱かれた幼児が、目を見開いてカンタベリー大主教からの祝福を見つめている姿がかわいらしい。陪餐後には458番の聖歌「神の恵みは くすしきかな」で賛美した。荘厳な礼拝の最後は412番「主を求めよ 生きよ神の民」との

(前頁より)

- 9日(水) 宣教150周年記念礼拝実行委員会
 - 10日(木) 礼拝委員会
 - 10日(木) 青年委員会
 - 18日(金) 正義と平和・憲法プロジェクト作業会
 - 18日(金) 宣教150周年記念礼拝「執事打ち合わせ会」
 - 24日(水) 日韓協働プロジェクト・TOPIK合同会議
- <以上前報告以降追加分>

10月

- 1日(木) 正義と平和・憲法プロジェクト作業会
- 2日(金) 広報主査会
- 2日(金) プレ宣教協議会実行委員会
- 5日(月) 聖公会・ローマカトリック教会合同委員会
- 5日(月) 主事会議
- 8日(木) 管区共通聖職試験委員会
- 13日(火) 法憲法規委員
- 14日(水) 常議員会
- 14日(水) 女性デスク・ジェンダープロジェクト・人権担当者に関する会議
- 18日(日) ~20日(火) 人権担当者協議会(大阪)
- 19日(月) 正義と平和委員会
- 20日(火) ~22日(木) 主教会(北海道)
- 26日(月) ~27日(火) 文書保管委員会および作業会
- ~~27日(火) 年金委員会(11/5に変更)~~
- 27日(火) 青年委員会
- 28日(水) 教役者給与検討デスク
- 28日(水) 収益事業委員会
- 30日(木) 渉外主査会

11月

- 5日(木) 年金委員会
- 11日(水) 教役者遺児教育基金・建築金融資金運営委員会
- 13日(金) 財政主査会
- 17日(火) ウィリアムズ主教記念基金運営委選考小委員会(立教)
- 18日(水) 主事会議
- 24日(火) 礼拝委員会
- 25日(水) 常議員会

<関係諸団体会議等>

- 9月14日(月) NCC 平和憲法プロジェクト
- 9月25日(金) 日本キリスト教連合会(日基教団事務所)
- 9月30日(水) 東京都宗教連盟理事会(神社庁)
- 10月7日(水) ~12日(月) CCEA 会議(カンボジア プノンベン)
- 11月20日(金) NCC 常任常議員会

力強い歌の中で退堂行進が始まった。この礼拝のために選ばれた聖歌の意味深さを味わいたい。聖歌が終えてもまだ続く行進の中、子どもたちが「大波のように」の聖歌を繰り返し歌い、そのかわいらしい歌声は一人ひとりの心を和ませていた。

“楽しい”アクシデントはいくつかあったが、事故も無く無事に終えることができたことはありがたいことである。

日本聖公会に属する私たちは、150年の記念の礼拝は終えたが、さらに151年、またそれ以

後へと向かって歩み続ける使命が与えられていることは忘れてはならないだろう。

宣教150周年記念礼拝のテーマ（こぎ出せ、沖へ）であるイエスのみ言葉（沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい—ルカ5：4）にシモンが応答した言葉（しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう）を深く理解していきたいものです。そしてそれをさらに豊かにしていくためにも、今年の5月31日に出された「日本聖公会宣教150周年記念 主教会教書」を熟読していきたいものです。

連載特集 日本聖公会宣教150周年記念礼拝 ①

宣教150周年からの出発

首座主教 北海道教区主教 ナタナエル 植松 誠

日本聖公会宣教150周年の記念礼拝は、当初の予想を遥かに超える3000人ほどの参列者が東京カテドラル聖マリア大聖堂に集い、聖霊の大きなうねりのような躍動感に満たされた。この記念礼拝からそれぞれの地に帰っていった人々によって、この日の感動が各地で伝えられていると思う。

この礼拝への準備段階として、今年の聖霊降臨日には、宣教150周年に際しての主教会教書が出された。その中で、私たちは、過去150年にわたる日本聖公会の歴史を顧み、多くの宣教師や先人たちによる宣教の働きへの深い感謝を表明した。しかしながら、その歴史の中で、日本聖公会がキリストの福音を忠実に証ししていくことができなかつた過去もあったことを認め、それを神の前で懺悔し、人々への謝罪をも表明した。日本聖公会が、小さな教会でありながらも、そのような歴史を持った教会であることは、これからの日本聖公会の歩みにとっては、その宣教の方策を立てる上で大変重要であると思う。それゆえに、主教会教書が出された後、記念礼拝の特祷や懺悔、代祷の作成に

おいても、また、記念行事の平和シンポジウムについても、その観点からいろいろな議論が行われた。

日本聖公会が今、どのような基盤の上に立ち、何を宣教の重要課題にしていくのか、それが今回の記念礼拝でもはっきりと表されたと思う。「こぎ出せ、沖へ」という主の呼びかけに、今私たちは新たな歩みを始めようとしている。過去への悔い改めから、「平和と和解」の器となるべく、日本聖公会は日本にあっても世界にあってもその使命を果たしていくことの再確認の場が今回の記念大礼拝であったと思う。「平和と和解」は教会のわざである以上、日本や海外の紛争、分裂、不正などにおいて、日本聖公会として積極的に関わっていくことが求められている。東アジアの平和のために、アングリカン・コミュニオンの一一致のために。また「平和と和解」は、一人ひとりの使命でもある。「平和と和解」を大上段に構えるのではなく、身近な場で、私たちが関わらなくてはならないことがいくらかもあるのではないか。家族の中に、教会の中に、地域社会の中に、私たちは平和と和解を

もたらず器として、ひたすら従順に、地道に、
辛抱強く、主の福音を証ししていくことが大事

だと思ふ。

日本聖公会宣教 150 周年記念礼拝を終えて

実行委員長 主教 植田仁太郎

去る9月23日、カトリックの聖マリア・カテドラルを拝借して、日本聖公会宣教150周年記念礼拝を、予定どおり、無事に終えることができました。会場整理を担当して下さった方々によれば、当日用意した式文が、200部程度残っただけだそうですから、およそ3,000人ほどの方々が、全国からご参加くださったこととなります。

この喜びの礼拝を共にささげる恵みをお与えくださった神さまに、まず感謝したいと思いますし、当日馳せ参じてくださった多くの聖職・信徒のみなさま、そして参列できなかったけれどもお祈りのうちにこの礼拝を憶え、支えてくださった全国諸教会のみなさまに深く感謝致します。

当初から、会場として拝借したカテドラルでは、全国からお集まりくださるであろう熱心な礼拝参集者を、収容し切れないのではないかと、という危惧を憶えておりました。礼拝を準備する側と致しましては、誠に心傷む悩みでした。この恐れは現実のものとなりまして、多くの方々に、席のないまま、長時間立って礼拝をしていただく羽目になりましたこと、—予想されていた

ことだけに、誠に申し訳なく思っている次第です。そのような、必ずしも充分と言えなかった準備にもかかわらず、みなさまが忍耐と情熱をもって礼拝に参加して下さった、そして、礼拝を心のこもったものにして下さったことが、何よりの大きな喜びでした。

また、実行委員諸兄姉、そして主教会の祈りの中での準備の実りとして、150周年に当たっての主教会教書と、当日の礼拝式文に表された、感謝・反省・ごんげ・喜び・新たな決意の精神が、礼拝のうちに一貫して表明されたのは、わたしたちの心に残る大切なことでした。

最後に、目白駅頭の案内に始まり、多くのボランティアの方々が、礼拝の開始から終わりまで、そして海外のお客様の送り迎えまで、心を尽くしてご奉仕くださったことは、礼拝そのものを充実したものとして下さった大きな大きな要素であったと、心から御礼申し上げます。日本聖公会全体が、「ごぎ出せ、沖へ！」と、未知の歩みを始めることができますように、心から祈るものです。

宣教 150 周年記念礼拝信施奉獻先について

9月23日記念礼拝信施金は2,467,666円でした。

この信施は、「カンタベリー大主教のアングリカン・コミュニオン宣教基金」に献げられます。

* アングリカン・コミュニオン宣教基金とは、全聖公会の管区や教会と、カンタベリー大主教の国際的な働きを支えるために設けられた基金です。

この基金のおもな3つの目的：

- ① 緊急時に、アングリカン・コミュニオンの管区や教会に援助をすること
 - ② アングリカン・コミュニオンにおける重要な宣教活動や伝道活動を支えること
 - ③ 国際連合におけるアングリカン・オブザーバーなど、国際機関や国際会議に公式代表者を送ること
- アングリカン・コミュニオン宣教基金が目指しているのは、各地の教会や教区、管区の支援活動に取って代わるのではなく、アングリカン・コミュニオンを代表して現地教会の働きを支えることです。

日本聖公会 150周年記念聖餐式のための カンタベリー大主教説教 — 「裸足の」宣教の継続を—

2009年9月23日、東京

日本を目指した聖公会の宣教の働きは何人かの巨人とも言うべき人々によって始められました。これらの人々の筆頭は、私たちが記念しております只今から数えて、150年前に日本においでになったチャニング・ウィリアムズ主教でありました。しかし、本日私は日本聖公会の性格と方向性を決定づけた、もう一人の偉大な神の僕、英国の有名な聖職の家系出身の、エドワード・ビカステス主教を取り上げたいと思います。兄弟がビカステス主教の記念のために出版した本には、同主教の献身や深い祈り、また、牧会的配慮などのことが非常に明瞭に記されています。

この本に収められている数々の鮮やかな思い出の中で特に際だちますのは、名古屋の大きな個人の住宅の一室で堅信式を司式するビカステス主教の姿を伝える、ある英国人聖職による日本訪問の記録です。その訪問者に強い印象を与えたのは、ビカステス主教が

堅信式をするために靴を脱いで家に上がったというだけのことなのですが、それは彼にとっては、日本の習慣を非常に尊重した同主教の姿勢を示すものとしてとても重要だったのです。

このささやかな情景描写は、単に優れた儀礼的な所作の記録にとどまるものではないと私は思います。キリスト教の宣教は数多くの違った状況において、重い靴を履いた、全く自発的な多くの担い手の沢山の足がそれぞれの地を踏むことによって、担われて来たと言うことができるのではないのでしょうか。しかし、裸足による宣教以外に宣教が現実化することはありえません。裸足は、基督教の歴史の中では、多くの場合、貧しさを示す印です。そのために、フランシスコ会やカルメル会がその改革に際して、心新たに質素な生活をする印として裸足、もしくは、サンダル履きで暮らすことを規則として採用したことを、連想することができると思います。これは痛みやけがを負う覚悟があるということを示す印であります。そしてまた、聖書にありますように、進むべき道を裸足で歩くということは旅の終わりに足を洗ってくれる誰かが必要だということをも示しています。しかし、聖書のみ言葉はほとんどの場合、聖なる地に立っているからこそ、その人は靴を脱ぐのだと述べられています。ですから、燃える芝のところで主に出会ったモーセは、その立ち位置が聖なる場所なので、靴を脱ぐよう命じられるのです。

これまで申し上げましたことは宣教の特質について、いったい何を語るのでしょうか。それは、質素でなければ、つまり、宣教者が自分の属する文化という防衛的な重装備、また、自分の政治力や権力などを捨てない限り、ミッションは効果的ではないということ語るのです。



日本に対するヨーロッパ人の宣教はこれまで常に政治、権力、貿易、金銭などと複雑な関係にありました。何世代もの長きにわたって日本におけるキリスト者の証言を封じさせることになった、17世紀日本の恐るべきキリスト教迫害は、外国人の野望に対する恐れが原因だったと言うことができます。またオランダとポルトガルなど異なる植民国家間の敵対関係がキリスト教の宣教の正当性を大きく傷つけることになりました。キリスト教の宣教を再度受け入れさせるための、19世紀における日本開国の努力もまた外国貿易や外国の文化を受け入れさせることと結びついていました。そして、日本のキリスト者は、ある段階にさしかかると、外国の文化という重い靴を脱ぎ捨てたいと熱望するようになりました。それは日本人キリスト者が、ちょうどヨーロッパのキリスト者同様、国家的な野望と愛国主義的侵略という新しい靴を履く準備ができた時期のことでした。

質素であるということは地面を軽やかに歩くということであり、信仰に関する異質な表現を押しつけもせず、信仰を国家の一時の利益や都合と結びつけて考えることもしないということです。過去の誤ちに関して公的に謝罪と懺悔を表明し、犠牲者との和解を積極的に求めようとする、日本聖公会がこの数十年の歩みの中で示して来られた勇氣は、非常に多くの人々を感動させて参りました。私は本教会の代表者が悔い改めと寛容の精神を分かち合ってくださった、1998年ランベス会議での礼拝を深い感動をもって思い起こします。あの8月6日、日本以外の代表たちは、日本の人々との和解を求めて懺悔の心でお付き合いしなければならぬと、深く感じたことでありましよう。

私たちが軽やかに歩むこと、つまり、私たちに罪と過ちを認めさせなくする誇り、また、過去の傷をいつまでも引きずらせる恨みとを、二つながらに解放することをわたしたちが学ぶ時に、和解は実現するのです。日本聖公会は、こ

のように軽やかに歩く能力によって、偉大な寛容を示して来られました。このような自由こそがこの社会とそれを含むより広い世界において日本聖公会が担いする宣教の中身なのです。軽やかに歩くということはまた、私たちが自らの価値だとか、現在に至るまで自らが成し遂げたことの意味などに依拠するのではなく、むしろ自分の場所を訪れる来客を歓迎し、愛する創造者また贖い主のみ手の内に彼らを保つことだということを理解することでもあるのです。私たちは、自らの安全と成功を持続させるために力を尽くす必要はありません。なぜならば、何が降りかかろうと神は私たちをお支えになり、その尽きることのない憐れみをお約束くださるからです。

このことはまた、宣教が地面の石くれによって、また、簡単には望み通りに進ませてくれない私たちの現実によって、傷つくこと、私たちの足の皮や肉で直に地面を踏むことをも、進んで引き受けるということなのです。キリストはおん自ら地を軽やかに歩まれますが、そのみ足は、人間の歩みから生ずる妨げによって汚され傷つけられ、そして最後に拒絶という釘によって傷つけられるのです。キリストが死から起こされる時にも、その素足は危険と苦難の旅の印であり続けます。もし私たちがキリストと共に歩もうとするのであれば、私たちは主の自由とこの世に残された主の軽やかな足跡を共有することになるのですが、それと同時に、私たちは汚れや傷を免れることができないことをも覚悟しなければなりません。

肉体的あるいは精神的に苦しむ人々と同じ道を歩む時、宣教は最も現実的なものとなります。ただその場合にだけ、私たちはキリストの道を歩むことになるのです。再び日本聖公会に戻ります。日本聖公会は忘れられ見捨てられた人々、都市や田舎に住む貧しい人々、暴力に苦しむ女性たち、子供たち、在日外国人と共に立ち、また、共に歩もうとする積極的な姿勢を示

しています。このような道を歩むことは成功や安全を保障することはありませんけれども、主イエスとの本当の交わりをもたらすに違いありません。主イエスとの交わりなくして、愛をもって他者と連帯することなどありえませんし、他者との連帯なくして主イエスとの交わりはありえないからです。

このことが、裸足で歩むこと、聖なる土地ゆえに自分の靴を脱ぐこと、と結びついた第三の主題に私たちを導きます。ビカステス主教は伝統的な日本の家族と同じように家に入る時に靴を脱ぎましたが、それは単純な行動に過ぎませんでした。しかし、その国の慣習に順応する外国人であったビカステス主教は、その家が聖なる場所に他ならないとこと、誰かに歓迎されることは神がそこにおられることの印であることを良くご存じでした。宣教師はどこに派遣されようとも、神が先立って行かれ、それぞれの場所を聖なる場所になさるということのをわきまえていなければなりません。どこかの国や文化がただそれだけで神聖だというわけではありません。むしろ宣教において神が私たちをお導きになる時、神ご自身が接触し、癒そうとお望みになる、人間の命という聖なる空間に私たちを導入なさるのです。

このことを学ぶために長い時間が必要でした。しかし、私たちは初めて神をそこへお連れするような新しい状況に踏み込もうとしているわけではありません。神は常に私たちに先立って歩まれるからです。したがって、本当の宣教とは、神がいまし給う場所の印を求めること、また、その場所に至る道を備えるために神がなさっておられることの印を探し求めることだということになります。宣教とは語るのと同様に聞くこと、いや、道を備えたもう神に従順に従うことができるよう、語る前に聞くことを私たちに求めます。宣教とは、私たちの後においでになる神のための場所を整えるために、私たちの直面する現実を完全に否定することだけなのでは

ありません。宣教とは、神に目を向け、神に耳を傾け、神が最も深い敬意と感謝をもって出会うよう私たちにお望みになる人々と連帯することなのです。そうすることによって、私たちは人々が投げかける疑問や、伝えたいと思っている求めについて本当のところを理解するようになるのです。宣教とは、人々を尊敬することに他なりません。

したがって、日本に聖公会の信仰が伝えられて150年がたち、この遺産に喜びをもって感謝しようとする今、私たちは自分たちがいかに良き音信(おとずれ)をもってこの国に、この社会に向き合おうとするのかを考えるよう求められているということになります。

まず、第一に求められますのは質素であるということです。私たちは自分を宣べ伝えるのではなく、また自分をあらゆる人びとの疑問に対する答として提供するのではないと、聖パウロは語っています。私たちは神が和解と変革という約束によって大いなる賜物をお与えになることを弁え、また和解と変革の気構えをもって生きる戦いを自ら担うことによって、常にその物語の全体を始めそれを完全に実現なさる方として、神を指し示すのです。私たちは、人間の文化という賜物を感謝しつつもそれを絶対化することなく、軽やかに歩くこと、また、身軽に旅することを学ぶのです。

第二に求められますのはリスクと連帯です。私たちは自分を守ること、ただキリスト者の家族という小さな交わりを暖かく安全に守ることだけ、を求めことはありません。私たちは、イエスのみ名によって途方にくれる人々や不安にさらされている人々また抑圧された人々と連れ立って、人間の苦難の道を歩むのです。

そして、第三に求められますのは敬意を払うことです。私たちは傲慢かつせっかちではなく、個人や文化を含めた、隣人の人間としての生

活という豊かな素材から積極的に学び、それを喜んで受け止める姿勢で自分の隣人たちに向き合うのです。

もし私たちがこの「裸足の」宣教を継続できるならば、私たちはイエスご自身の単純明快さ、またそれゆえにキリストの変革の恵みと宣教の特質とを自らの姿勢として生きることになるでしょう。神は、大いなる激励と大いなる忍耐と「軽やかに歩く」ことへの大いなる喜びをもつ

て、日本のキリスト者、特に聖公会の信徒たちを祝福しておられます。私たちがこの国に住む神の愛する子らに、イエス・キリストの良き音信（おとずれ）が全ての人に与える、自由と平和と希望の可能性、と、有意義かつ和解された生活の可能性を届けようと努める時、神が私たちと共に歩みまた私たちを通してお語りになりますように。

(翻訳：司祭 興石 勇)

日本聖公会宣教150周年記念プログラム 夕の礼拝

—日本聖公会のはたらき—

米国聖公会 キャサリン・ジェファーツ・ショーリ総裁主教 説教

2009年9月22日

エレミア31：8-9a、詩編103：1-6、マタイ5：1-10

今宵私たちは、日本聖公会宣教150周年を神に感謝するためここに集まっています。当時イギリス帝国の統治下になかった地域で最初にこの管区が誕生したことにも感謝を捧げます。とはいえ、日本聖公会のルーツが実はアメリカ帝国主義にあることを、まず指摘したいと思います。1853年～54年ペリー提督が通商条約の締結を要求して来航した後、中国で活動していたアメリカ人宣教師が来日しました。神の働きは、平和や神聖さとは無関係の出来事から始まることもあるのです。

ウィリアムス師、リギンズ師、シュミット博士の3人の宣教師は中国から直接日本に入国し、医療や教育の分野で活動を始めました。そんな活動のひとつが現在この立教大学へと至っています。日本での積極的な宣教活動が許されるまでにはさらに数年が必要でした。しかし中国から来日したこれら宣教師たちの活動は、大変重要な意義を持っていました。19世紀半ば、聖公会をはじめとする各教派の宣教活動は、植民地主義の色彩を弱め、活動する地域の独自性

を重んじる(indigenize: 現地化する)方向へ転換しつつあったのです。

これら3人の聖公会宣教師が来日したのと同時期、Henry VennとRufus Andersonが「宣教の現地化(indigenizing ministry)」について論じ始めました。その目的は、自力で宣教する力を持つ自立した教会を各地に広めることであり、そのような教会のありかたこそ、国策が変化するその後数十年間の日本において、日本聖公会が存続するために不可欠な要素となりました。

現地化し自立した教会、自らの力で宣教できる教会、という理想は預言者エレミアの描くビジョン---あらゆる場所から、様々な立場の人が集まり、神によって、それら全ての家族・国々がひとつにされる---の実現を助けるでしょう。このビジョンはまだ実現していませんが、この地に蒔かれた種は、すでに芽を出し、実を結び始めています。キリストの体に属するすべての組織と同様、日本聖公会の使命は、天の国を映す

地上の姿として、全世界の和解、すべての創造物の和解に向けて働くことです。

この働きに加わるための非常に適切なヒントが、マタイによる福音書の中に2つ記されています。山上の垂訓の最初と最後の部分は、心の貧しい人、および正義のために迫害される人に、天の国へとつながる祝福が与えられると書かれています。この2つの要素は、日本聖公会とその使命を特徴づけるものです。

日本聖公会は、占領と戦争の暴力への加担を悔い改めたことで、世界のキリスト教徒に、勇気ある手本を示しました。心の貧しい人にとって、傲慢や自己弁護は不要です。彼らはただ真実を語ります。たとえそれが痛みを伴い、恥ずべきものであっても。この真実を通して、道、真理、いのちを分かち合い、天の国の実現を目指すのです。日本聖公会の謝罪は、韓国聖公会にも大きな影響を与えました。日本聖公会の証（あかし）がなければ、TOPIK(Towards Peace in Korea)の取り組みは不可能だったでしょう。

二つ目の祝福は、義のために迫害される人々に与えられます。日本聖公会が、沖縄やアイヌのために活動していることは、必ずしも広く知られているわけではありませんが、これらの地域に、天の国の物差しをもたらしました。この活動を通して、皆様方も祝福されています。

現在日本聖公会が直面する課題は、これまでの150年間と同じです。いかに信仰の人、心の貧しい人、正義の人となるか — これらの価値を必ずしも大切にしない文化の中において。自



写真提供：東京教区

分の周りの社会を、天の国へと変えていけるかどうかは、19世紀の宣教師たちのように、この3つの価値を生きることができているかにかかっています。（彼らもまたこれらの価値を、使徒パウロから学びました。）地域に根ざす教会は、パチンコ店やアニメ、匿名の群衆があふれる都会で福音を語っていかなくてはなりません。しかし過去にそうであったように、日本聖公会は現代においても、それを成し遂げることができるでしょう。

皆さんの証は、他者、特に同じように世俗的・物質主義文化のなかで努力しているヨーロッパや北米の教会にとって参考になるでしょう。皆さんは私たちに何を教えてくださいますか？日本の良き地に育った種から、どのように福音を宣べ伝えますか？

（翻訳：高山絵美）



□主事会議

第57総会期第13回 2009年9月4日(金)

主な協議事項

1. CCA 総会出席者に関して(2010年4月14日～21日、マレーシア クアラ Lumpur) NCC等の関係者と相談する。
2. アングリカン・コミュニオン・リーダー(人材登録)に関して
青年委員会、神学校に相談し、あるいは候補者を推薦していただく。
3. 平和宣教教育活動資金(仮称)の創設に関して
資金規程を作り、常議員会に提案する。
4. 冊子『教会と教育』残金(580,280円)の用途に関して
上記資金の創設が決められた場合、この資金のために用いる。
5. 第3回子ども平和会議実行委員派遣に関して
1名の候補者が挙がり、打診することとした。
6. 台湾の台風被害に関して
宣教150周年記念礼拝出席のために台湾教区主教が来日の折、渉外主事が話を伺って、状況を判断する。
7. 重債務国支援に関して
英国USPGが現在行っているプロジェクトを支援することとした。USPGにプロジェクトのリスト送付を要請中。

□各教区

北海道

- ・第68(定期)教区会 11月22日(日)17時30分～11月23日(月)16時 主教座聖堂札幌キリスト教会

東北

- ・第89(定期)教区会 11月22日(日)18時～11月23日(月)16時 東北教区主教座聖堂並びに教区会館

北関東

- ・第76(定期)教区会 11月23日(月)10時半～17時 志木聖母教会

中部

- ・第80(臨時)教区会 10月12日(月)9時～16時 主教座聖堂名古屋聖マタイ教会
目的:教区主教選挙のため
- ・第81(定期)教区会 11月23日(月)9時～16時 主教座聖堂名古屋聖マタイ教会

大阪

- ・第102(定期)教区会 11月23日(月)9時～17時 主教座聖堂(川口基督教会)

神戸

- ・神戸聖ミカエル大聖堂聖別50周年記念式典 9月26日(土)15時 記念講演会:マイケル・ドー主教(USPG総主事)、ステイブン・ミント主教(ミャンマー聖公会大主教)17時 歓迎夕食会 9月27日(日)10時半 記念大礼拝 司式:中村豊主教説教:マイケル・ドー主教 13時半 祝賀会
- ・第77(定期)教区会 11月23日(月)8時～17時 神戸聖ミカエル大聖堂(神戸教区主教座聖堂)



†逝去者 霊魂のパラダイスにおける光明と平安を祈ります。

ジェームス児玉久雄(元祈祷書改正研究委員、東京教区)2009年8月11日(火)逝去(86歳)

司祭 ダミアン村瀬敬輔(神戸教区・退職)

2009年8月27日(木)逝去(85歳)

主教 コルネリオ田崎安男(東北教区・退職)

2009年9月22日(火)逝去(86歳)

司祭 ミカエル津田昌男(東京教区・退職)

2009年10月5日(月)逝去(87歳)

150年記念行事(9/22-23)の忘れ物:

メガネ(臙脂色ケース入り)、薄茶色上着(ぶどうブローチ付)、薄茶色帽子、カメラレンズのキャップ(TAMRON)、花柄紙袋(CD、本、お茶、靴下など入ったもの)、以上の忘れ物をお預かりしています。お心当たりの方は管区事務所までご連絡ください。

《人事》

東京

司祭 フランシスコ・ザビエル高橋宏幸

2009年8月31日付 三光教会牧師を解任する。

2009年9月1日付 三光教会管理牧師を任命する。
香蘭女学校出校を命ずる。

中部

聖職候補生 フィデス金 善姫

2009年7月20日 執事に按手される

執事 フィデス金 善姫

2009年7月20日付 松本聖十字教会牧師補に任命する。

主教 フランシスコ森 紀旦

2009年10月1日付 休養を命じる。

主教 サムエル大西 修(大阪)

2009年10月1日付 中部教区管理主教を委嘱する。

京都

司祭 ベルナルド大川 誠

2009年8月31日付 上野聖ヨハネ教会および伊勢聖マルコ教会
管理の委嘱を解く。

主教 ステパノ高地 敬

2009年9月1日付 上野聖ヨハネ教会および伊勢聖マルコ教会
の管理を委嘱する。

沖縄

司祭 イザヤ金 軒洙 (大韓聖公会・釜山教区)

2009年9月1日付 沖縄教区主教座聖堂付勤務を命ずる。

《教会・施設》

社会福祉法人聖マッセヤ会(京都)

2009年7月16日付 中西庄之助、理事長就任(富田正通退任)

可児ミッション(中部)

電話設置

住所 509-0214 岐阜県可児市広見 4-12

電話 0574-58-0241

日本聖公会宣教150年記念グッズほか

- 帽子 ロゴマーク入り 1000円
- クリアファイル ロゴマーク入り(青年委員会作成) 3枚セット 500円
- ボールペン(正義と平和・憲法プロジェクト作成)
憲法9条入り 200円

以上のお申し込みは 管区事務所(☎03-5228-3171)へ。

- 記念礼拝DVD 9/23 記念礼拝および9/22 夕の礼拝の様相を収録

価格1000円(送料込み) 2009年11月発売予定

問合せ先: 宣教150周年記念礼拝実行委員会

(代行: 東京教区事務所 足立・高柳 ☎03-3433-0987)



広島平和礼拝 2009 を恵みのうちに終えて

広島平和礼拝 2009 実行委員 河原 和則

2009年8月6日、今年も広島は64回目の原爆被爆者追悼の夏をむかえました。私たち日本聖公会神戸教区も8月5日(水)・6日(木)の2日間、第4回目の「広島平和礼拝2009」(以下、平和礼拝)をおこなうことができました。これも各教区・教会のみなさまのお祈りとご協力のおかげと心より感謝申し上げます。

今年の平和礼拝の大きな特徴は、その趣旨にも掲げました「若い世代に平和を伝える」でした。その大きな伏線となったのが、今年の夏に「神戸教区・中高生大会」(中高生が主体となって企画・開催する年間の最大行事)を広島で開催するようにと、神様より与え示されたことでした。またそれを受け、準備委員会においても中村 豊神戸教区主教様より示唆いただいた「子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く(イザヤ書11:6c-d)」をスローガンとできたことも大きな恵みでした。

5日(水)は、午前9時半から広島平和公園での碑巡りと原爆資料館見学に始まりました。昼食をはさんで、午後1時から、今回の学びプログラムである東謙吉さんの被爆体験をお聞きました。(写真下・参加者は約170名)その後、参加者がグループに分かれて分かち合いの

時を持ちました。平和行進で歌う歌の練習、軽食ののちに広島平和公園へ移動しました。(以降はカトリック合同プログラム)

夕方5時15分から原爆供養塔の前での「祈りのつどい」がおこなわれました。被爆し水を求めて苦しめられた被爆者へ捧げる献水がおこなわれ、聖公会側は中村神戸教区主教様、三鍋横浜教区主教様と他教区から参加された4名の信徒さんにご奉仕をいただきました。また平和を願う詩の朗読を、九州教区の山崎司祭様、横浜教区の武藤司祭様に担っていただきました。その後、広島平和公園からカトリック世界平和記念聖堂までの「平和行進」を行いました。カトリック・聖公会総勢約600名の行進で、道行く人々にキリスト者の平和と祈りをアピールしました。(次ページ写真・聖公会からの参加者は約150名)

夜7時から、世界平和記念聖堂でおこなわれた「平和祈願ミサ」では、私たち聖公会も聖書第一朗読、共同祈願(代祷)、奉納祈願への参加を担いました。今年もカトリックの方々との交わりを一層深め、この平和行事協働計画を通じて、平和の構築には「互いが知り合うこと」という学びの機会を多く与えられたことを感謝します。

翌6日は、朝8時から広島復活教会で原爆犠牲者追悼聖餐式を中村教区主教様の司式・説教のもと行われ、黙祷、8時15分の鐘とともに、原爆で犠牲になった方々の魂の平安と私たちが主の平和の器として働いていけるためにお祈りました。

第4回目の「広島平和礼拝」も多くの皆様に支えられ開催することができました。中高生たちも充



実した「第46回神戸教区中高生大会」にしてくれた様です。世界は今、オバマ大統領のブラハ演説に象徴されるように少しずつ核抑止力による平和構築の限界に気付き始めています。来年以降も8月の「平和行事」を通じて、広島・長崎がより連帯し、核兵器のない、また争いのない平和な世界の実現に向けてより大きく転がり始める起動力となれるように、主の平和の器として用いられるように、共に学び・行動し・祈りたいと思います。また引き続き、貧困・孤独など社会の隅におかれ、小さくされた人々の中にこそ、主の平和があるようにと祈ります。この一年もみなさまのお祈りのうちに加えてくださいますよう、お願い申し上げます。

また来年、広島でお会いしましょう。ありがとうございました。(広島復活教会信徒)



※写真協力：宮地寛仁（広島復活教会）

※広島平和礼拝公式サイト

<http://hpps.web9.jp/>

九州教区平和を考えるプログラム

「長崎に立つ2009・夏」

佐々木 崇（久留米聖公会教会信徒）

今回の夏のプログラムは8月8日から8月10日の2泊3日の日程で行い、会場は長崎聖三一教会でした。

1日目のセッションIでは城臺美弥子さんをお招きしました。城臺さんからはご自身の被爆体験の話だけに留まらず、日本の加害責任の話や昨今の長崎の高校生がしている1万人署名の話などお聴きしました。私たちにとっては平和活動の大先輩ですが、今回のセッションは一方的に聴くのではなく城臺さんと参加者が共に話し合うディスカッション形式にしました。その中で被爆当事者でなくても自分の平和への思いを言葉にして行動していくことの重要性を教わり、これからの我々の活動に大きな後押しをもらったような会となりました。

2日目の午前中は教会での原爆記念礼拝を長崎の信徒の方たちと守り、黙祷を捧げ、午後

からは爆心地公園で、今までに私たちが出会い聞いた体験談や知ったことの中から各々の心の中にある平和への願いを込めたメッセージやイラストを描いたカードを配り、平チャリ参加者が出会った人たちから集めて来たメッセージの布に、さらにメッセージを書いてもらうことで平和への思いを交換するということをしました。

最初はどのように声をかけて良いものか思案していましたが、各々が工夫して、3時間ほどの活動で100名を越える方々に声を掛け、用意していた布には多くの方のメッセージが寄せられました。夜は交流会をして他教区から参加してくれた方などと分ち合い大いに盛り上がりました。

今回の平プロは“学び”から具体的な“活動”にシフトした会となりましたが、今年は教区を越えて若者たちが平和を願いヒロシマからナガ

サキへと自転車でアピールしたり、教会を出て街頭に出ての活動は新鮮でした。これらの活動が来年以降どうなるかは分かりませんが、こういう活動が出来る土壌が出来つつある会が九州教区を中心にしてあることこそがこれから他の活動にも生きるのではないかと思います。

『私たちは微力だけれど無力ではない』とは長崎で1万人署名活動をしている高校生の言葉ですが、私たちもそうありたいと願うと同時に貴重な証言をしていただいた方たちから渡された平和へのバトンを次の世代に渡

すのは私たちだということを感じたプログラムでした。



九州教区「ヒロシマーナガサキ平和の旅 by チャリ」報告

代表 武田 宗久 (福岡聖パウロ教会信徒)

私たちは2009年8月5日～10日にかけて「ヒロシマーナガサキ平和の旅 by チャリ」と題し、広島と長崎を自転車でつなぐ旅を行いました。この旅の目的は、ただ広島から長崎まで自転車で走るだけでなく、様々な人から平和についてのメッセージを大きな一枚の布に書き込んでもらい、そのメッセージをより多くの人たちに伝えるように、それを携え原爆が投下された地であ

る広島と長崎をつなぐ事です。また、広島から長崎まで皆と力を合わせ、楽しく走る事も目的の一つでした。

この旅には九州教区から男性3名、女性2名、沖縄教区から男性2名、女性1名、また車で伴走してくださった方3名、合計11名が参加しました。一日目は広島から周南市まで100キロ。二日目は周南市から佐賀市まで220キロ。

三日目は目的地の長崎まで110キロ。総走行距離430キロをリレー形式で走りました。中には3日間で250キロも走るメンバーもいました。計画当初は予定通りに走る事はちょっと無理ではないかと思っていましたが、意外に予定通りに進む事ができました。

この旅で印象的だったのは、旅の途中で出会った人々との触れ合いでした。見送ってくれた広島復活教



会また神戸教区の方々を始め、立ち寄った小倉インマヌエル教会、福岡聖パウロ教会でも熱い歓迎を受けました。また、周南市で面識のない私たちを泊めてくださった方、前日からおいしいカレーを仕込んでくれた佐賀祈りの家の方、迷った時に道を親身になって教えてくれた方々、そして多くのメッセージを書いてくださった人たち、とてもあたたかく私たちを応援してくれました。途中大雨にあったり、道に迷って途方にくれたりしても「頑張っ！」の一言で「よし行こう!まだまだ頑張れる!」という気持ちになれました。三日間みんなで力をあわせて一つの事をなすとげる、ということにもとても感動しました。旅が終わる頃には皆一つのチームの様になっていて、心の通い合った仲間になっていました。

この旅では戦争について、たくさんの事を考えることができました。まず広島と長崎の地に立って、ここで私と同じ命が一瞬にして何万となくなってしまったんだなあと感じました。もし、またそのような

事が起こってしまったら、家族や友人、また途中で会った人々や、この旅と一緒に頑張ってきた仲間も一瞬にしていなくなってしまう。絶対にそんな事は起きてはならない。現在まだ戦争をしている国があります。また日本も戦争をしていました。そして唯一原爆が投下された国です。戦争の残酷さを世界に広めていかなければと強く感じました。



第4回「日韓聖公会青年セミナー」報告

司祭 エッセイ 矢萩 新一

テーマ:「葛藤を越えて、平和の世界へ…」

2009年8月13日(木)～18日(火) 華川(ファクション) およびソウルにて

韓国側:参加者15名+スタッフ5名、日本側:参加者13名+スタッフ7名、合計40名

今回、日本側参加者は8月のセミナーに先立ち、去る7月24・25日に名古屋において、池住義憲さん(立教大学キリスト教学研究科特任教授)をお迎えし日韓の歴史の学びや日韓の葛藤(conflicts)とは何か、真の平和のためには武装するよりも非武装でいる方が現実的であることを学び、事前準備会を行った。

一部準備会に出席できなかった参加者や韓国側参加者も含め、8月13日にソウルの仁川空

港で40名が顔を合わせた。そこからDPRK(朝鮮民主主義人民共和国)との国境にほど近い華川という村にある宿舎(廃校になった小学校を利用した施設)へバスで移動すること約3時間、車中で自己紹介をしながら到着して夕食を頂き、日韓聖公会青年セミナーが幕を開けた。食後は、「世界がもし100人の村人だったら」をスライドにしたお話しの開会聖餐式、そして思い思いにイメージする「平和」をクレパスや絵の

具でTシャツに描き、明け方まで続く懇親会へと流れ、1日目が過ぎた。

2日目は朝から船に乗って世界各国から集められた平和の鐘を展示したベルパーク、その上に築かれた平和ダム（元は北からの攻撃を阻止するために建設された軍事ダム）を見学し、ダムの入り口に設置された巨大な平和の鐘をみんなで願いを込めて撞いた。午後からはバスでDMZ（38度線の前後2kmずつの非武装地帯）に入り、いくつものゲートを通して銃を手にした兵士が監視を行う最前線の施設を見学した。河を挟んだ向こう側がDPRKだと説明を受けるが、そこは有刺鉄線が延々としかれた山間の風景で、いくつか監視塔が望める景色だった。中には畑を耕して作物を育てる人もいて、緊張状態を一見して理解し辛い感覚を抱いたが、確実にそこには隔たりがあることを思い知らされ、38度線を敷くきっかけを作った日本の戦争責任を心に刻んだ。韓国の青年たちの多くも初めてDMZに入る経験をし、共にこの風景を目に焼き付けることができたことは貴重な経験であった。夕方には一級水に生息するヤマメつかみをして刺身や炭火焼きを堪能し、冷たい川の水で日が暮れるまで遊び、宿舎に帰ってからは休息の時間であったが、夜が更けるまで懇親会を続けたのは青年たちの若さであった。

3日目は平和教育学を教える2名の講師によるノンバーバルコミュニケーション（非言語対話）のセッションが午前から



平和ダム

夕方にかけて持たれた。言葉やジェスチャーを用いずに、パズルを完成させたり、互いの意思疎通を図りながら作業をしたり、日常生活の中で起こる葛藤の風景をロールプレイにして考えたり、新聞紙で2メートルのタワーを作ってみたりと、時間を忘れてコミュニケーションをとる作業に没頭した。言葉の通じない国の人間同士が、平和を構築する上で大切なのは、相手が何を求めているのか、互いの思いを受けとめて行動するために自分は何をすればよいのか、少し我慢して相手の必要を満たそうとすることなど、すなわち「配慮」をもって相対することがとても重要であることを学んだ。夕方からはキム・グンサン主教も訪問してくださり、サムギョブサル（豚バラ肉）のバーベキューを楽しみ、日韓参加者対スタッフによる20万ウォン争奪キックバレーボール対決が行われ、参加者の翌日の夕食代がプラスされた。その後はキャンプファイヤーで交流を深めいつもの通り夜は更けていった。



8月15日、日本では終戦記念日、韓国では光復節の一日であった。

4日目は早朝からバスでソウルへ移動し、11時からの大聖堂でのミサに与った。昼食を大聖堂の食堂ですませ、グループに分かれてソウル市内を夜になるまで散策し、円

仏教という仏教の修練施設に帰り着き、半分くらいのメンバーは安らかな眠りに就いていた。

5日目は夕方まで再び平和学習の時間で、日韓における葛藤について両国メンバーからの発表があり、日本側は戦後補償の問題、歴史認識（教育）の差による葛藤、憲法9条を掲げているながらそれを変えようとする動きがあることや

木が伐採され山肌があらわれている所に有刺鉄線が敷かれている



イラク派兵が9条に違反するという判決が名古屋であったことなどを紹介した。日韓関係の葛藤を考えることは、私たちが歴史とどのように向かい合うかということ。個人レベルでの交流と国家間の信頼関係の間には隔たりがある現状。唯一の被爆国として憲法9条を世界に広める責任があるが、実際にはアメリカの軍勢力も含めて莫大な軍勢力を保有しているという葛藤もあることを踏まえながら、平和をつくり出していく一歩を一人ひとりが歩んでいかなければならないと発題した。

夜は手首に付けられるロザリオをみんなで手作りし、日々の生活の中で平和のために祈るツールとして用いられるおみやげができた。この日の夜は本来フェアウェルパーティーが予定されていたが、韓国側メンバーの提案により、一人ひとりの思いを分かち合う時間が持たれた。韓国側のメンバーの中には、準備の段階からこのセミナーに関わり、日本の青年たちと交流を深めて信頼関係を気付いていきたいという強い思いがあり、夜の交流会の準備や後片付けに始まり、場の雰囲気盛り上げようと一生懸命に奉仕をしていた青年が数名いた。そんな

中、日本の青年たちは韓国という初めて訪れた場所ということや韓国側のメンバーの配慮に気付いていながらもなかなか手が出せないでいた現状や、言葉の通じないメンバーとのコミュニケーションをとるよりも日本側のメンバーという時間がどうしても多くなってしまっていた。そんな現状に葛藤を覚えた韓国側のメンバーからの訴えがあった。今まで、日韓の葛

藤を解決して行くには互いの配慮が必要不可欠だと学んでおきながら、そうできていない自分たちのふがいなさや、思いの行き違いによって煮え切らない気持ちを分かち合うこととなった。一人ひとりの思いを丁寧に聞き合い、どんな思いでこのセミナーに臨んできたか、このセミナーで学んだことや素直な感想など、実に5時間に及ぶ分かち合いの時間が持たれた。言葉が十分に通じない仲間と共に平和をつくり出していくことへの課題を、最終日にして確認し合えた大変貴重な充実した時間を過ごせ、感謝の思いである。

先の10回の交流キャンプから志向を変え、今セミナーで4回目となるが、今回の準備を中心的に担ってくださったのは、TOPIK (Toward Peace In Korea) のスタッフであったがゆえに、DMZの訪問や平和学という専門分野での学びが可能となったのだと思う。一から作り上げてくださったスタッフや一緒に様々な準備を担ってくださった青年たちに感謝しながら、第4回日韓聖公会青年セミナーの報告としたい。

(京都教区 金沢聖ヨハネ教会)

第4回日韓聖公会青年セミナーに参加して

日本側ユーススタッフ 浮田 倫太郎

今回のセミナーでは、「日韓の葛藤の解決」ということがひとつのキーワードとなってプログラムが組まれた。プログラムはどれも興味深い

内容ばかりで、どのような学びとわかちあいができるのか、楽しみであった。しかし準備にあたり、いざ「葛藤とは何か」と考えてみると、

テーマそのものに戸惑いをおぼえてしまった。「葛藤」とは何だろうか。日韓の間に横たわる葛藤…歴史認識のずれ? 帝国植民地時代の戦後未処理問題? 文化先行の交流? 平和をおびやかそうとする戦争? 日本の憲法9条の改変? 考えれば考えるほど、なるほどさまざまな複雑な思いが葛藤としてみえてくる。私は、さまざまな葛藤を捻出し、知識をもとに葛藤を捉え準備をすすめた。だが、私が心に留めた多くの葛藤は、本当の意味で自分の中に生まれた葛藤ではなかったのかもしれない。

「華川という場所はとてもいい場所ですよ」と知り合いから聞いていた。プログラムは詰め込みではなく、ときに体を動かしたりし、参加者同士の活発な交流もできた。自然の中で、自然の恵み、人との交わりを確かに感じた。非日常の空間で、楽しいキャンプは進む。ただ、不安もあった。とても楽しいけれど、葛藤の解決について、このセミナーを通じ何かを学んだか? 知ったか? ここで何を心得て帰るのだろうか?

ソウルに戻ってきたのちの17日、平和学に基づく平和実現に向けた葛藤解決の具体的実践のセッションの中で、今回のテーマについて、大きな理解を得ることができた。葛藤とは何であるか、またその解消に向けた具体的な実践方法を知った。他者間の葛藤の解消のためにはただ漠然と未来を見るのではなく、lived history (生きた歴史)、remember history (記憶された歴史) の認識を共有し、どこまでも対話を貫いていく。対立する相手、敵対する相手とも積極的に対話をし、しかもその際には、自分の主張をもしっかりとし、とことんお互いの対話をすすめる。

しかしながらこの時点でも、日韓の葛藤は、自分自身からすこし遠くにあるようなもの、自分に関係する大きな問題だがその内容が大きすぎるがゆえに、核を見失ってしまっているかのようであった。

フェアウェルパーティーが近づき、別れの時も迫ってきた最後の夜、韓国の青年から「もう少しお互いを深めたい」との話があった。こ

れまで学んだことわかちあいを深めるのかと思っただ、韓国の青年の口から堰を切ってあふれ出た言葉は、この日までの両国青年のセミナーの持ち方、とくにセミナーへの日本側の参加者の姿勢についてであった。

韓国の青年はセミナー中たくさんのもてなしをしてくれた。マッコリをふるまってくれ、夜食を作ってくれた。だが、楽しい語らいの中で、私は大切なことを見落としていた。

日本側の参加者は、日本の青年同士でとても仲がよかったこともあり、日本側だけで固まって盛り上がっていることも多かった。韓国の青年にとってみれば、交流する気が少ないようにみえたらう。また、夜食を作ってもらって食べたきり、後片付けもせず酔っぱらって寝てしまっていた。台所では韓国の女性参加者が1から10までしてくれていた。なんの配慮もできていなかった自分が人として恥ずかしく、みじめであった。

韓国の青年の発言に、はじめは衝撃を受けた。なぜ、今ここでそのような話を…。でも、これこそが今回ここに集った意味であった。韓国の青年たちのこのきっかけがなければ、私たちは葛藤に気づくこともなく、うやむやな交流を経て、お互いの心にわだかまりを残したまま、笑顔をとりつくろい別れていたことだろう。

はじめて隠れていた真実を知った。相手の気持ちを痛いほど知った。そして、自分自身を痛く知った。そこにみるべき葛藤がみえた。深夜2時まで5時間話した。葛藤の解消のため敵対する相手とも対話し続けること。みなその日の日中に学んだことを胸に、一人ひとり語った。そこには妥協というものはないように思われる。ただ相手を素直に受け入れるのではなく、自分の思いもしっかりと伝えあう。当然、それは苦しい過程である。けれども、その過程が大切であり、大きな結果を導いた。どちらかが折れれば済むのではない。一人ひとりの青年が、そして日韓の青年同士がウィン・ウィン型の解決に至ったのだ。また一連の流れの中で、セミナーに対するスタッフの見解と反省の言葉も聞

かれた。これはもはや、究極の和解、ホーポノポノに近いものが自然と行われていたのだ、と思う。

かくて葛藤がひとつ、解消された。平和というものを大きな次元で捉え、大きなうねりとして平和の実現に向け動いていくことは大事だ。だが、平和は常に隣の人との間にある。その、一番大事なものにあらためて気付かされた。そして、今回のセミナーを通じての経験は、非常に大きな自信になり、今後の日韓青年セミナーへの明るい展望さえもみえた。

韓国と日本の青年が、同じ葛藤を体験し、それを青年同士の交わりのなかで、積極的な語り・対話を行うなかで、解消しえた。つまり、お互いの中に、大きな大きな、ほころびのない平和を築いたとあってよい。

今回のセミナーを準備してくださった大韓聖公会の青年、スタッフの方々に心より感謝します。そして、このセミナーを通して常にまもり導いてくださった主なる神に感謝します。

(京都教区 大津聖マリア教会)

日韓青年セミナーに参加して

横浜教区 横浜聖アンデレ教会 伊藤 久実

終えてみると日々プログラムに追われるような感じで、あっという間に最終日を迎えたという印象です。平和ダムの見学、DMZ（非武装地帯）では当初予定されていたトレッキングはできなかったものの七星展望台から北朝鮮の風景を見ることができました。見学を通して、朝鮮半島の抱える問題を（ほんの少しではありますが）感じることができ、同時にその背景には日本が蒔いた種が存在することも痛感しました。

平和教育では平和とは何なのか、日々の生活の中で遭遇する葛藤を越えて平和を作り上げるにはどうしたらよいかというようなことを、ワークショップと講義を通して経験しました。ワークショップと講義はいずれも1日かかりで、それぞれ別の講師・団体が担当したため、ところどころで“気づき”はあったものの、漠然とした感想を持ったまま、若干消化不良で終わったように感じます。

日本側は今回のセミナーで「日本の文化紹介」「日本の平和課題について」の発表があることを受けて事前準備として勉強会を行いました。戦争責任のことや憲法9条に関することなど2日にわたってセッションを通して学んだようです。残念ながら、私はこの準備会には参加することが出来ませんでした。後日メール

で報告と配布資料を確認し、セミナー参加に当たって日本側では、韓国の青年たちとこうした問題についてじっくりと話をするのがこのセミナーの目的と認識していました。しかし韓国の青年たちは先に述べた平和教育（ワークショップや講義）の他に、キャンプファイヤーや川遊び、ソウル観光など積極的に日韓の青年たちが交流する場（というよりも韓国の青年たちが精一杯もてなしてくれるような形）を準備してくれており交流キャンプのつもりでプログラムを組んでいたようでした。このような認識のずれが日を重ねるごとにおおきくなっていったようで、最終日に韓国の青年たちから、我々日本の青年達に対してセミナー中に感じたことが意見として出されました。

交流キャンプとして準備をしてきたが、一緒にキャンプを成功させるという意識が欠けるのではないかというような内容を通訳を通して聞きました。不満を持ったまま終わってしまっただけは、今まで「平和」を築くために一緒に学んできたものがまったく生かされないではないかという意見で、日韓の間ですれ違いを無くすためにどうしたらよいかという前向きな姿勢が見て取れました。お互いにとってとても辛い時間でしたが、韓国側が表面化してくれたことに今は感

謝しています。

その中で、言葉に関することや参加に対する姿勢があげられました。「(韓国側で)日本語が話せる人数に比べて、(日本側で)韓国語が話せる人がいない…」という言葉の問題は、突き詰めていくと、話せないということ・知らないということは相手の国に対して関心が薄いのではないかということにつながるかと思います。初日、空港から華川へ向かうバスで隣り合った20歳の男の子は、道中必死に日本語で話しをしてくれ、韓国語のまったく話せない私はその必死さにただただ頭の下がる思いでした。韓国の青年たちは、達者ではなくとも一生懸命に日本語を話そうとしてくれたのを思うと、確かに私はそうした面が欠落していたと痛感させられました。

また、「毎回参加者が違う…」という参加者の継続性が指摘されました。何年もの間、隔年でお互いの国を行き来しながら行われてきたセミナーが、なかなか実りあるものにならないと感じていたようです。こうしたセミナーがあることにもう少し早く気づくべきだった、関心を持つべきだったと思いました。

個人的にも反省する点はいくつかありました。また日本側の参加姿勢にも多少なりとも問

題はあったと思います。浮上した問題がすべてきれいに解決して閉会したわけではないですが、どちらが悪いという問題ではなく、今回両国の間に認識のずれがあったということが明らかにしたことが解決の糸口になるように思います。こうした問題をどのように解決して次回につなげるか、という課題を共有できたことがいい経験になったのではないかと思います。

これまで外国の青年達との交流会、それどころか全国の青年大会にすら参加を考えもしなかった私が、今回参加しようとしたきっかけは、DMZのトレッキングという“なかなか行けないレアなところに行ける”という単純な好奇心からでした。自分でも半ば気紛れな動機だったなどセミナーの最中からいささか反省していましたが、日本と周辺の数々の国との関係を考える際のきっかけが欲しかったのは事実です。今回は最後の日韓の葛藤も含め、非常にいい経験をさせてもらったと思います。

今回は日本側でも初参加ということで他の参加者の皆さんや教役者の方々に大変お世話になり、ありがとうございました。最後に、時間をかけて今回のプログラムを準備してくださった韓国の青年の皆さんと教役者の方々に本当に感謝いたします。

